

## 高校生の規範意識に関する研究(3)

—大学生との比較を中心として—

安藤 明人

(武庫川女子大学文学部人間関係学科)

### Norm consciousness in highschool students(3): Comparisons with college students

Akihito Ando

*Department of Human Relations, Faculty of Letters,*

*Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

#### Abstract

The present study was conducted to compare attitudes toward anti-norm deviant behaviors of highschool students with those of college students. 260 female and 209 male highschool students were requested to complete the questionnaire, measuring the degree of allowance toward 30 deviant behaviors from three different viewpoints such as (1) when the deviant was female highschool student, (2) when the deviant was male highschool student, and (3) when the deviant was most intimate friend of the opposite sex. Results revealed that highschool students had double standards in their norm consciousness. This finding was same as the result obtained from a sample of college students (Ando, 1990; 1991; 1992). There were, however, two main differences of norm consciousness between highschool and college students. First, highschool students showed higher degree of allowance toward anti-norm deviant behaviors than college students. Secondly, the magnitude of double standards of highschool students in norm consciousness was smaller than that of college students. These results suggest that norm does not function as a controlling and regulating system over one's behavior in highschool students.

#### 緒 言

安藤(1990<sup>1)</sup>;1991<sup>2)</sup>;1992<sup>3)</sup>)は、大学生を対象とした規範意識に関する一連の研究から、大学生は男女を問わず、男性より女性に対してより厳しい規範行為の基準をもっていることを明らかにした。つまり、行為そのものの内容は同じ規範からの逸脱行為であっても、その行為者が男性であるか女性であるかによって、その行為が許されるか否かの判断基準を変え、女性に対して規範を男性より厳格に遵守することを求める傾向のあることが明らかになった。この行為者の性によって、反社会規範行為に対する許容の基準を変えるという、いわゆるダブル・スタンダードの存在が確認されたことは、現代大学生が、ダブル・スタンダードを内包する現存の規範体系を肯定あるいは追認する態度をもっていることを示したものと理解できる。この態度は、行為者が同じ人間である以上規範行為の基準も当然同じであるべきである、という男女平等の理念からはずれるものである。ところが現代大学生は、民主社会で生まれ育ち、男女平等の理念を一つの柱とする教育を受けてきたはずである。しかし現実にはその規範意識は、男女別の規範体系を当然とする旧来の規範意識と表面的には何ら変わるところはない。

この「時代精神」と個々の人間がもつ意識・価値観の矛盾をどのように理解したらよいのだろうか。それを考えるためにはまず、この矛盾が生みだされ定着されていく心理・社会的プロセスを明らかにする必要がある。つまり、このような行為者の性の違いによって規範行為の基準を変えようというダブル・スタンダードがどのような発生機序をもち、それがどのようなプロセスをへて個人の規範意識の中に内化されていくかを明らかにすることが必要である。そのためには複数の年齢段階の被験者を対象とした規範意識に関する横断的な研究や、縦断的な手法を用いた長期にわたる規範意識の研究が必要となる。

そこで本研究では、被験者の年齢段階を従来の大学生から下げて、高校生を対象として規範意識の分析を行い、その結果を従来得られている大学生の結果と照らしあわせることにより、規範意識の内化のプロセスに迫ろうとする。

## 方 法

### 被験者および調査の実施

大阪府および兵庫県の共学の公立高校生 469 名(男子 209 名, 女子 260 名)を対象として, 1993 年 1 月から 2 月にかけて, クラス担任ないしは教科担任に依頼して, 調査を実施した。なお調査は, 無記名方式で行われた。

被験者の学年・男女別内訳は, 1 年生が 171 名(男子 81 名, 女子 90 名), 2 年生が 68 名(男子 18 名, 女子 50 名), 3 年生が 230 名(男子 110 名, 女子 120 名)であった。また, 被験者の平均年齢は, 男子 17.04 歳 (SD=0.98), 女子が 17.00 歳 (SD=0.99) であった。

### 調査の内容

調査項目として取りあげられた反社会規範行為は, 従来の大学生を対象とした研究(安藤, 1990; 1991; 1992)で用いられたものと基本的に同じ 30 項目である。ただし, そのうち 5 項目は高校生向きに内容を修正した。これらは一般的な高校生が日常的に経験するであろう反社会規範行為で, 清水 (1989)<sup>4)</sup>の分類にしたがうと, 反法的規範行為 4 項目, 反社会的慣習行為 7 項目, 反学校規範行為 11 項目, 反家庭内規範行為 8 項目, の合計 30 項目からなる。

調査では, これらの反社会規範行為に対する意識・態度が, 「そのような行為がどの程度許容されると思うか」という観点から調べられた。その際, その反社会規範行為の行為者が, ①女子高校生である場合, ②男子高校生である場合, ③もっとも親しい異性の友人である場合に, の 3 つの設定でその許容度に関する判断が求められた。なお回答は, 「許される」「やや許される」「やや許されない」「許されない」の 4 件法で求められた。

## 結果と考察

Table 1 は, 30 項目の反社会規範行為に対する許容度を, 被験者および行為者別にまとめたものである。ここで示されている数値は, 「許される」を 1 点, 「やや許される」を 2 点, 「やや許されない」を 3 点, 「許されない」を 4 点として計算されたものである。したがって, 2.5 点を中心として, 数値がそれより高い項目はそのような行為が許されない方向に認知され, 反対に中点より低い項目はそのような行為が許される方向に認知されていることを意味している。

### 規範からの逸脱に対する許容度に性差はみられるか

まず最初に, 反社会規範行為に対する許容度に性差がみられるかどうかを検討する。

女子高校生が行う規範からの逸脱に対する許容度に性差がみられた項目が 8 項目あった。このうち男子の方が逸脱に対して厳しいとらえ方をしていたのは「陰で先生の悪口を言う」( $p < 0.01$ )のみで, それ以外の「カンニング」( $p < 0.01$ ), 「生徒会行事への不参加」( $p < 0.01$ ), 「授業をさぼる」( $p < 0.05$ ), 「気に入らない人と話をしない」( $p < 0.01$ ), 「盗み」( $p < 0.01$ ), 「喫煙」( $p < 0.05$ ), 「借りたものを返さない」( $p < 0.01$ )の 7 項目は, いずれも女子の方がそれらの反社会規範行為に対する許容度は有意に低かった。この 8 項目中 5 項目までが学校内規範に属するものであることは, 高校生の全生活時間の中で大きな割合を占めている学校内でのルールに対する見方が男女で異なることを示唆する結果であり, 興味深い。

つぎに男子高校生が行う反社会規範行為に対する許容度における性差について検討する。女子と男子の間で, 男子高校生の逸脱に対する許容度に有意な差が見られたのは「先生の言うことに従わない」( $p < 0.05$ ), 「カンニン

高校生の規範意識に関する研究 (3)

Table 1. 女子高校生と男子高校生における反社会規範行為に対する許容度の比較

分類	被 験 者 行 為 者	女子高校生 (N=260)				男子高校生 (N=209)			
		女子	男子	検定	有意差	女子	男子	検定	有意差
項	目	Mean±SD	Mean±SD	Z 値	有意差	Mean±SD	Mean±SD	Z 値	有意差
学校	陰で先生の悪口を言う	1.53±0.73	1.64±0.81	1.62		1.73±0.99	1.62±0.95	1.16	
	アルバイトをする	1.15±0.45	1.11±0.37	1.11		1.29±0.72	1.16±0.57	2.04	*
	学校で決められた規則に従わない	2.47±0.82	2.33±0.88	1.86		2.41±0.98	2.22±0.95	2.01	*
	先生の言うことに従わない	2.56±0.78	2.43±0.83	1.83		2.41±0.95	2.26±0.93	1.63	
	勉強しない	2.05±0.86	2.00±0.86	0.66		1.95±0.97	1.87±0.98	0.84	
	テストでカンニングをする	3.56±0.76	3.47±0.88	1.25		3.29±0.98	3.20±1.05	0.90	
	生徒会行事に参加しない	2.51±0.93	2.43±0.94	0.98		2.27±1.05	2.19±1.04	0.78	
	授業をさぼる	2.77±0.97	2.60±1.00	1.96		2.53±1.13	2.42±1.14	0.99	
	気に入らない人と話をしない	2.22±0.98	2.20±1.00	0.23		1.92±1.01	1.87±0.98	0.51	
	授業中に私語をする	1.91±0.77	1.88±0.79	0.44		1.97±0.99	1.82±0.91	1.61	
	教室にゴミを捨てる	2.93±0.91	2.81±0.97	1.45		2.99±1.02	2.81±1.06	1.76	
	法	人のものを盗む	3.94±0.32	3.91±0.37	0.99		3.81±0.64	3.83±0.57	0.34
信号無視をする		2.11±0.91	2.03±0.91	1.00		2.17±1.03	2.04±1.00	1.30	
高校生が酒を飲む		1.83±0.90	1.73±0.89	1.27		1.87±1.08	1.65±0.93	2.22	*
高校生がタバコをすう		2.85±1.11	2.43±1.13	4.27	**	2.61±1.26	2.11±1.17	4.20	**
慣習	遅くまで夜遊びをする	2.26±0.96	1.71±0.85	6.89	**	2.41±1.09	1.75±0.88	6.80	**
	借りたものを返さない	3.78±0.50	3.71±0.57	1.49		3.57±0.86	3.61±0.78	0.50	
	約束の集合時間に遅れる	2.98±0.80	3.01±0.81	0.42		3.02±0.91	3.02±0.92	0.00	
	電車などでお年寄りに席を譲らない	2.71±0.80	2.66±0.85	0.69		2.67±0.96	2.64±0.98	0.32	
	登下校の電車やバスの中で飲食する	2.15±1.04	2.09±1.02	0.66		2.28±1.22	2.15±1.18	1.11	
	高校生の恋人とキスをする	1.32±0.63	1.31±0.61	0.18		1.36±0.77	1.29±0.65	1.00	
	高校生の恋人とセックスをする	1.75±0.99	1.68±0.95	0.82		1.59±0.93	1.47±0.84	1.38	
家庭	家の手伝いをしない	2.48±0.89	1.85±0.83	8.33	**	2.60±1.07	2.00±0.98	5.96	**
	理由を偽って親から金をもらう	2.77±1.07	2.63±1.07	1.48		2.75±1.13	2.57±1.14	1.62	
	母親に反抗する	2.25±0.86	2.15±0.92	1.28		2.38±0.99	2.22±0.98	1.66	
	親に隠れて特定の異性と交際する	1.47±0.76	1.40±0.70	1.09		1.61±0.97	1.44±0.83	1.92	
	親のいいつけに従わない	2.45±0.81	2.35±0.82	1.39		2.33±0.94	2.33±0.94	1.09	
	父親に反抗する	2.38±0.89	2.25±0.89	1.66		2.36±1.01	2.18±1.00	1.83	
	遊んでいて家の門限に遅れる	1.96±0.86	1.73±0.79	3.18	**	2.08±1.00	1.71±0.83	4.10	**
	親の反対する進路(進学, 就職)に進む	1.47±0.72	1.46±0.73	0.16		1.47±0.81	1.39±0.75	1.05	

注1) 得点が高いほど「許されない」と認知されていることを意味する。

注2) \*\*: p<0.01    \*: p<0.05

Table 2. 女子高校生と男子高校生における反社会規範行為に対する許容度の比較 (種類別)

分類 指標	女子高校生 (N=211)	男子高校生 (N=185)	検 定		
	Mean±SD	Mean±SD	Z 値	有意差	
全体	Σ F	70.50±12.56	69.45±16.01	0.72	N.S.
	Σ M	66.61±13.16	64.77±13.79	1.22	N.S.
	Σ I	67.48±13.51	68.24±16.23	0.50	N.S.
	Σ(F-M)	3.89± 5.56	4.69± 9.39	1.01	N.S.
学校	Σ F	25.55± 5.30	24.79± 6.57	1.26	N.S.
	Σ M	24.72± 5.59	23.58± 5.98	1.95	N.S.
	Σ I	24.95± 5.65	24.49± 6.74	0.73	N.S.
	Σ(F-M)	0.83± 2.25	1.21± 3.77	1.20	N.S.
法	Σ F	10.69± 2.29	10.47± 2.70	0.87	N.S.
	Σ M	10.04± 2.47	9.62± 2.42	1.71	N.S.
	Σ I	10.20± 2.50	10.30± 2.75	0.38	N.S.
	Σ(F-M)	0.65± 1.18	0.85± 1.56	1.42	N.S.
慣習	Σ F	17.00± 3.03	16.82± 3.98	0.50	N.S.
	Σ M	16.10± 2.99	15.92± 3.38	0.56	N.S.
	Σ I	16.23± 3.17	16.56± 3.93	0.91	N.S.
	Σ(F-M)	0.90± 1.58	0.90± 2.42	0.00	N.S.
家庭	Σ F	17.27± 4.08	17.37± 5.05	0.21	N.S.
	Σ M	15.75± 4.06	15.64± 4.56	0.25	N.S.
	Σ I	16.09± 4.20	16.89± 5.02	1.71	N.S.
	Σ(F-M)	1.52± 2.20	1.72± 3.25	0.71	N.S.

グ」( $p < 0.01$ ), 「生徒会行事への不参加」( $p < 0.01$ ), 「気に入らない人と話をしない」( $p < 0.01$ ), 「喫煙」( $p < 0.01$ ), 「高校生の恋人とのセックス」( $p < 0.01$ ), の6項目で, そのいずれも女子の方がそれらの逸脱行為に対してより厳しい見方をしていた。ここでも許容度に有意差がみられた6項目中, 4項目までが学校内規範であった。

以上の結果より, 逸脱行為の行為者が女子の場合であろうと男子の場合であろうと, ある特定の反社会規範行為に対しては女子高校生の方がより厳しい見方をしていることが明らかになった。

しかし, 規範全体あるいは規範の種類ごとでまとめてみると, 反社会規範行為に対する許容度に性差はみられないことが Table 2 からわかる。

Table 2 は, 規範行為の種類別に, それからの逸脱に対する許容度を女子高校生と男子高校生で比較した結果をまとめたものである。数値は, 反社会規範行為に対する許容度を得点化(1~4点)したものを規範の種類ごとに合計したものの平均値を示している。したがって, 全体では, 項目数が30項目なので合計得点は30から120点の間に分布する。同様に反学校内規範は11~44点, 反法規規範は4~16点, 反社会慣習規範は7~28点, 反家庭内規範は8~32点の間に合計得点が分布する。

表には, 反社会規範行為の行為者が女子高校生である場合(Σ F), 男子高校生である場合(Σ M), もっとも親しい異性の友人である場合(Σ I) について, 各規範の種類ごとに合計得点の平均値が示されている。また行為者によって逸脱に対する許容度がどのように異なるかを示す指標として, 行為者が女子高校生である場合と男子高校生である場合の許容度の得点差(Σ(F-M))の平均値が示されている。これはダブル・スタンダードの大きさを示す指標といえることができる。

これをみると, 規範全体でみても規範の種類別でみても, 規範からの逸脱に対する許容度に女子高校生と男子高校生の差はまったく見られないことがわかる。つまり前述したように, 個々の規範でみると女子高校生の方が逸脱に対して男子高校生よりも厳しい見方をしているものがあるものの, 全体としてみると, 高校生においては, 規範からの逸脱に対する許容度には性差はみられないことが明らかになった。

このことは, 男子より女子の方が全般的に厳しい規範行為の基準をもっていた大学生の結果(安藤, 1992)と大きく異なる。

高校生にも性による規範意識の相違はみられるか

今回の調査の主たる目的は、大学生を対象とした規範意識調査(安藤, 1990; 1991; 1992)で認められた、行為者が男性である場合と、女性である場合で、その反社会規範行為の許容度に違いがみられるという、いわゆる規範意識におけるダブル・スタンダードが、高校生においても認められるかどうかを確認することであった。

Table 1を見ると、被験者が女子高校生の場合、反社会規範行為の行為者が女子高校生である場合と男子高校生である場合で、その許容度に有意差が見られたのは30項目中、「喫煙」「夜遊び」「家の手伝いをしない」「家の門限破り」の4項目のみであった。この4つの行為に関しては、同じ行為をしても、その行為者が女子高校生の場合のほうがより許されないと、女子高校生は認知していた。つまり、女子高校生の規範意識にもダブル・スタンダードが存在していることが明らかになった。

しかしこの結果を女子大学生の結果(安藤, 1992)と比較すると、女子大学生では、今回の高校生調査でも同じ項目が用いられた25の反社会規範行為のうち、12項目についてダブル・スタンダードが認められ、そのうち「陰で先生の悪口を言う」を除いて、他はいずれも女子大学生の規範からの逸脱行為に対してより厳しい見方をしていた。このことより、今回調査を行った女子高校生は、女子大学生と比べて、行為者の性によって規範行為の基準を変えるという意識・態度は希薄であるといえることができる。

女子高校生においてダブル・スタンダードが認められた4項目は、「家の手伝いをしない」を除いて、規範からの逸脱によって自分の身に及ぶ危険や不利益の程度が、男性よりも大きいと想定していると考えられる項目である。その点女子大学生の場合、逸脱によって想定される実質的な危険や不利益に性差がないと考えられる項目においても、女性に厳しいダブル・スタンダードが認められた。このことにより、女子大学生のほうが「そのような行為は女性らしくない」という観念に影響された規範を意識の中により内在化していることが推測できる。

つぎに同じく Table 1で、男子高校生の規範意識について検討する。男子高校生において、30項目の反社会規範行為のうち、その許容度に性差が見られたのは7項目で、そのすべてにおいて、女性の方に厳しいダブル・スタンダードをもっていた。このうちの4項目は女子高校生においてもダブル・スタンダードが認められた反社会規範行為であり、「アルバイト」「学校の規則に従わない」「飲酒」の3項目は、男子高校生においてのみ、ダブル・スタンダードが認められた行為である。

この男子高校生の結果を男子大学生の結果(安藤, 1992)と比較すると、男子大学生では、高校生調査でも同じ項目が用いられた25の反社会規範行為のうち、12項目についてダブル・スタンダードが認められ、そのいずれの項目も、女子大学生の規範からの逸脱行為に対してより厳しい見方をするものであった。このことより、男子高校生も、男子大学生と比べて、行為者の性によって規範行為の基準を変えるという意識・態度は希薄であるといえることができる。

しかし、全体としてみると、高校生の規範意識にもダブル・スタンダードが存在していることは Table 2から明らかである。被験者が女子高校生でも男子高校生でも許容度の評点の合計は、行為者が女子高校生の場合の方が有意に高く(女子高校生: $z=3.11, p<0.01$ ; 男子高校生: $z=3.01, p<0.01$ )、女子が規範から逸脱した場合の方が、同じことを男子がした場合より「許されないと認知されていることがわかる。

また規範の種類別にみても、反法的規範(女子高校生: $z=2.80, p<0.01$ ; 男子高校生: $z=3.19, p<0.01$ )、反社会慣習規範(女子高校生: $z=3.07, p<0.01$ ; 男子高校生: $z=2.34, p<0.05$ )、反家庭内規範(女子高校生: $z=3.84, p<0.01$ ; 男子高校生: $z=3.48, p<0.01$ )においては、いずれも女子の逸脱に対してより厳しい見方をするというダブル・スタンダードが、有意な傾向として認められた。ところが唯一反学校内規範だけは、男女ともにダブル・スタンダードが認められず(女子高校生: $z=1.57, N.S.$ ; 男子高校生: $z=1.85, N.S.$ )、したがって学校内の規範からの逸脱は、その行為者が男子であろうと女子であろうと区別なく、同じ基準の上で評価されていることが明らかになった。

この結果は、ダブル・スタンダードの発生機序を考える上で非常に興味深い。というのは、学校という場は、男女が同等の立場でのぞみ、学習という目的のために行動を共にする場所であり、そこにおいて男女平等の理念が公式的に語られ、それが実施に移されている場所だからである。そのような構造をもった学校という場面においては、そこで作動する規範にダブル・スタンダードが見られないという結果は、それ以外の一般の社会や家庭においては、男女平等の考えかたが理念としてはまだ浸透していないことを示唆するものであるといえる。

規範意識の構造に性差はみられるか

最後に、規範意識の構造の性差について検討する。

いままでの所では、今回用いた30項目の反社会規範行為を、清水(1988)<sup>4)</sup>の分類にしたがって、アブリオリに反学校、反法、反社会慣習、反家庭の4つの種類に分けて、規範意識の分析を試みた。しかし、被験者となった高校生が、この分類に沿うかたちで規範をとらえて、その許容度を評定しているかどうかはわからない。

そこでつぎに、その逸脱行為に対する許容度の評定を手がかりにして、クラスター分析の手法を用いることによって、高校生の規範意識の構造を分析する。また規範意識の構造に性差がみられるかどうかについてもあわせて検討する。

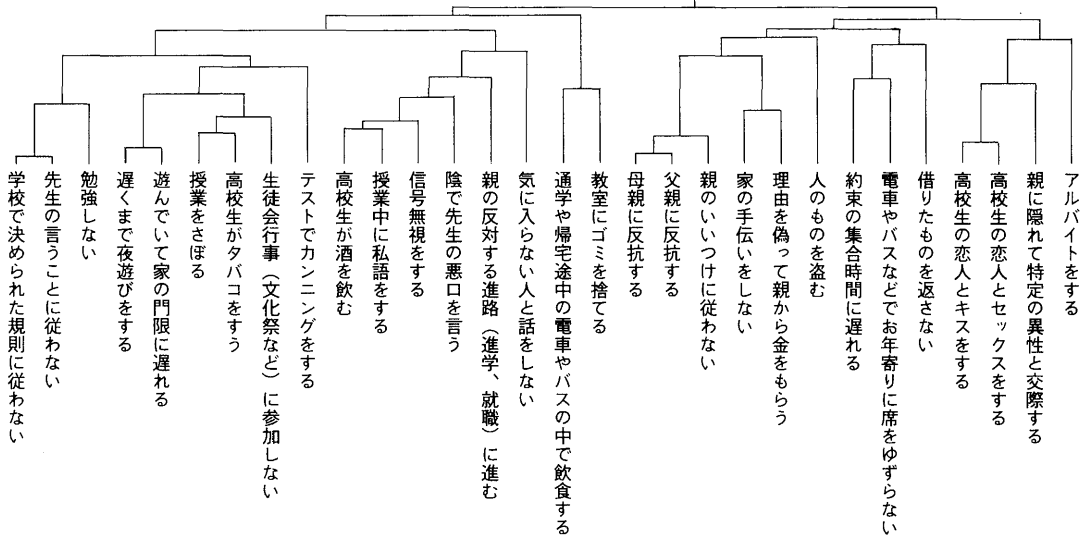


Fig. 1. 規範意識のクラスター構造(認知者:女子高校生→行為者:女子高校生)

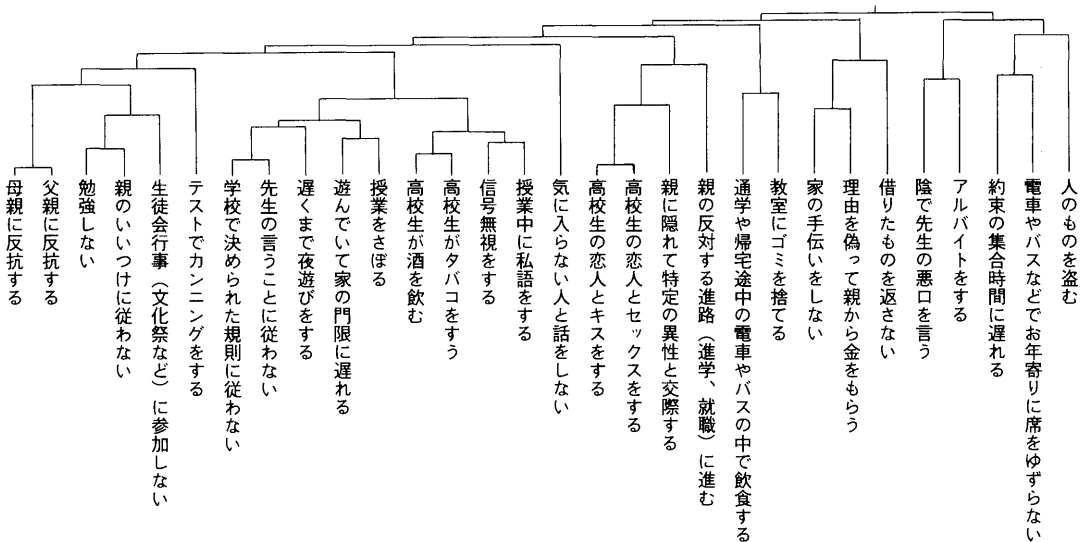


Fig. 2. 規範意識のクラスター構造(認知者:女子高校生→行為者:男子高校生)

Figs.1-4 は、30 項目の反社会規範行為をクラスター分析によって分析し、その構造をデンドログラムの形で示したものである。なお分析には、最長距離法を用いた。

Fig.1 は、女子高校生の被験者が逸脱行為の行為者として女子高校生を想定した場合のクラスター構造を示している。同様に Fig.2 は、女子高校生がとらえた、想定された逸脱の行為者が男子高校生の場合のクラスター構造である。Figs.3, 4 は、男子高校生の被験者が、逸脱の行為者として女子高校生 (Fig.3) と男子高校生 (Fig.4) をそれぞれ想定した場合の規範意識のクラスター構造である。

各規範行為のまとまりかたをみて気がついた点を指摘すると、まず「喫煙」に関して、その行為者が男子か女子かによってその評価が男女ともかなり違っている。つまり、男子高校生の喫煙の場合は、男女とも「飲酒」とほぼ

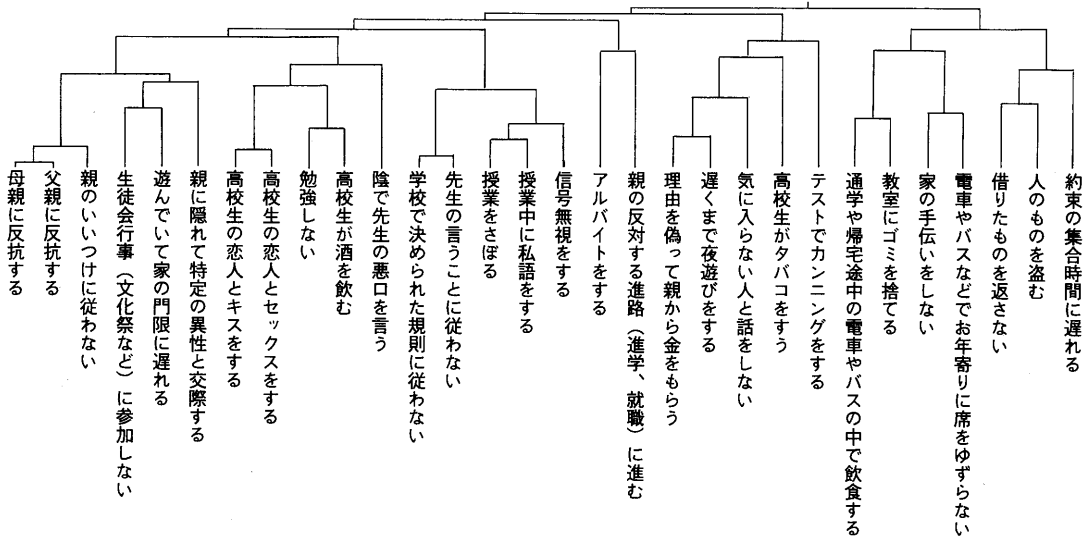


Fig. 3. 規範意識のクラスター構造(認知者:男子高校生→行為者:女子高校生)

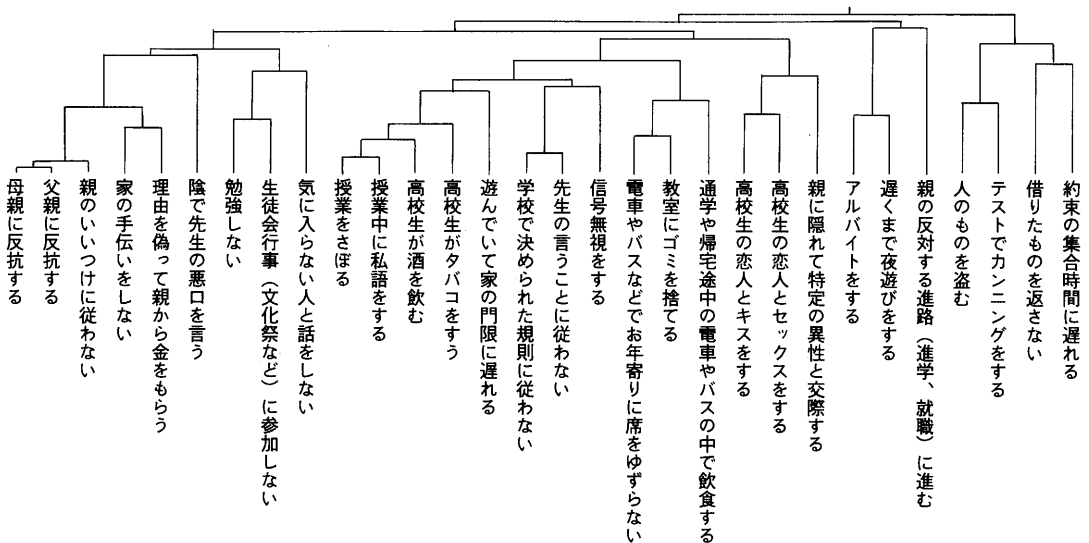


Fig. 4 規範意識のクラスター構造(認知者:男子高校生→行為者:男子高校生)

同じ位置づけになっている。ところが女子高校生の喫煙になると、被験者が女子でも男子でも、飲酒とは異なったクラスターに属している。そのクラスターは、その逸脱行為を行ったときに実質的な不利益が自分自身に及ぶと想定される行為のクラスターになっている。この結果から、男子も女子も女性の喫煙に対してかなりネガティブな評価を下していることが推測できる。

「家の手伝いをしない」について見てみると、女子高校生の認知および男子高校生による行為者が男子高校生の場合の認知の3つのケースでは、「理由を偽って親から金をもらおう」という逸脱行為とまとまり、親との関係で作動する規範として位置づけられている。ところが男子高校生による行為者が女子高校生の場合の認知だけは「お年寄りに席を譲らない」という項目とまとまる。このことから男子高校生は「女子が家の手伝いをするのはあたりまえ」という意識をもって、それを「女らしい」行為として期待しているのではないかという推測が成り立つ。

これ以外にもそれぞれの反社会規範行為のまとまり方を詳細にみていくと、4つのケースそれぞれに相違はみられるが、全体としてみると、規範意識の構造に男女による大きな相違はみられない。そして総体的にみると、高校生の規範意識を規定している要因として、規範が作動する場面(家庭、学校、一般社会など)、その規範に関与する人間の種類(家族、教師、友達など)、規範からの逸脱にともなう実質的な危険・不利益の程度の評価、などが考えられる。

以上の結果より、大学生だけでなく高校生においても、男女にかかわらず、行為によっては同じ反社会規範行為をしても、その行為者が女性である場合の方が「許されない」と認知するという規範意識をもっていることが明らかになった。しかしそのような意識・態度は、大学生と比較すると希薄で、大学生ほどダブル・スタンダードは顕著でなかった。また、高校生の反社会規範行為に対する許容度は、大学生と比較して全般的に高かったが、ダブル・スタンダードが認められた項目でも、女子高校生の「喫煙」に対する女子高校生(2.85)および男子高校生(2.61)の評定と女子高校生が「家の手伝いをしない」ことに対する男子高校生の評定(2.60)以外は、その許容度の評定値は中点である2.5以下である。したがって、ダブル・スタンダードが認められた反社会規範行為は、それらの行為それ自体はあまり悪いとは思っていないが、行為者が男性の場合と比較して、女性によるそれらの行為に若干の心理的抵抗を感じる行為であると言えるのかもしれない。その意味において、今回取り上げた30項目の規範は、大学生においては各個人の行動を統制する規範として機能していたが、高校生においては規範としての規制力をあまり発揮していなかったといえるのかもしれない。

今回の高校生を対象とした規範意識の研究により、大学生の規範意識との相違がある程度明らかになったが、この相違がどのような要因によって生起するのかを明らかにするためには、調査対象者の年齢層を広げるとともに、このような規範意識を内化させていくプロセスに関する縦断的な研究が今後必要となろう。

また今回は、ある特定の限られた高校あるいは大学で得られたデータで高校生と大学生の規範意識を代表させ、その比較を行ったが、規範意識を個人の意識の中に内化させるエージェントとして、家庭におけるしつけだけでなく、高校生や大学生の生活において大きな部分を占める学校環境の要因(たとえば、教育方針や伝統、学生文化など)が大きく働いているとしたら、今後そういった要因にも留意しながら規範意識の分析を進める必要があろう。

## 引用文献

- 1 安藤明人, 大学生の規範意識と社会的自己に関する社会心理学的研究,  $\Sigma$ , No. 8, 101-110(1990).
- 2 安藤明人, 女子大学生の規範意識に関する研究(2)-反社会規範行為に関する認知的側面からの分析-, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 38, 79-86(1991).
- 3 安藤明人, 女子大学生の規範意識に関する研究(4)-反社会規範行為に関する性差について-, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 39, 63-70(1992).
- 4 清水賢二, 非行少年の規範意識, 日本教育社会学会第40回大会発表要旨集録, pp.161-162(1988).